山と博物館

第30巻 第6号　1985年6月25日　大町山岳博物館

仏崎観音寺奉納競馬大会（5月26日）　撮影 丸山隆士

夏に思う

大東亜戦争が終って四十年目の夏が来る。

昭和二十年、沖縄の硫黄島が玉砕の直前、私は九州、宮崎県の山中で本土決戦に備え幕舎生活をしていた。いよいよ沖縄へ移動らしいという噂の中で遺書を用意するよう命ぜられ、お互いに髪と爪をきって封筒に入れ、最期の別れの言葉と決意をしたため提出した。覚悟はしていたが、おさえても、おさえても瞼にうかぶのはおふくろの顔とふる里の山なみであった。もう一度会いたい――、もう一度みたい――、そうしたら死んでもよい、ただそれだけをおもいつづけた。

しかし、間もなく終戦となり、私はその年の秋なかばにひとり大糸線にのって帰還した。車窓からみた秋の野づらとふる里の山なみの温かさをいまも忘れることが出来ない。

その後、私のくらしに幾変遷はあったが、戦後、自然は心のふる里、人間のふる里だという言葉をきくたびにあの日のことを思い出す。ささやかで古い話だけれど私にとって平和への原点の一つであった。

戦争体験――、それは戦後平和憲法具現化への大きなエネルギーとして今日の社会を築いてきたが、四十年の歳月を経た現在、圧倒的に戦争体験のない世代がふえ、ときに戦争体験のある人でさえ記憶を失いがちになるときがある。おそろしいのは戦争と平和に対するマンネリ化である。

戦後政治の総決算を進める昨今の政治と社会の流れは大きく右旋回の方向をしめしている。しかし、これが真に国民の望んでいる流れであろうか――。

今年、戦後四十年目の夏が来る。改めて平和憲法の原点に立もどろう。近代の核戦争は始まれば地球的規模で全人類は絶滅すると言われている。平和も民主主義もあぶないと気づいたときはおそかった、ではすまされない。自然とふる里にとって戦争は最大の破かい者だ。私は山岳と自然を守る博物館は平和のシンボルでなければならないと思っている。

（山岳博物館協議会委員　大日方嘉雄）

野草シリーズ
夏の草花

保尊裕之

夏は一年の中で最も草木の繁茂する季節であるが、低山や田畑、路傍などには案外草花が少ない。夏に野草の花を訪ねるには湿原か湖沼か高い山地のいわゆる高山植物などに的をしぼった方がよいかも知れない。とまれ野草シリーズの第五回として安曇野の夏の草花をとり上げてみることにする。

一、田畑や路傍の花

・**ヒメジョオン**（キク科）北米よりの帰化植物で、田畑の畦や路傍に一面に咲き、厄介な雑草となっている。白い小さな菊花はよくみると可憐である。最近大分高い所にまで進出している。近頃これに似たハルジョオンも増えはじめた。茎が中空であるのですぐ区別できる。

・**コウゾリナ**（キク科）路傍から山麓まで乾いたところに多い、黄色い菊花とざらついた茎や葉が特徴的で、夏から秋おそくまで咲き続ける。

・**オグルマ**（キク科）小菊のような黄色い花の形から小車と名がついた。よく似たものにカセンソウがある。オグルマの舌状花は先がきれいに揃っているがカセンソウは不揃いだし、葉に鋸歯があるのでわかる。

・**タカサブロウ**（キク科）面白い名の植物である。ヒマワリの花を小さくしたような感じの白花をつける。水田の畦際などによくみかける。

・**キカラスウリ**（ウリ科）夏の夕方から夜にかけて大きな白花を咲かせるが、花弁の先が白糸状に裂けていて実に印象的である。漢方薬の括楼根、括楼仁として有名である。

・**ミゾホオズキ**（ゴマノハグサ科）庭の片隅や溝端の湿ったところによく生える小さな草で、黄色い花をつける。がくの形がホオズキに似て、溝の辺に多いことからこの名がある。大町以北の山地や高山にはこれに似たオオバミゾホオズキがある。

・**オオマツヨイグサ**（アカバナ科）夏の夕方咲くこの花は歓賞用として北米から入ったものが野生化したものという。ヨイマチグサとかツキミソウとか呼ばれている。似たもので花の小さいアレチマツヨイグサもこの辺には多く、両方が混生している。

・**ガガイモ**（ガガイモ科）やゝ乾いたところに多い蔓草で他の草に巻きついている。綿をかぶった星形の花は印象的である。茎を折ると白い乳液が出る。紡錘形の果実は熟すと裂けてタンポポのような種子を風に飛ばす。この辺ではコアメといっている。

シロバナヤマホタルブクロ

・**ホタルブクロ**（キキョウ科）この辺のものは殆んどヤマホタルブクロである。がく片の間の付属物がない。普通は紅紫の花をつけるが大町以北には白い花のシロバナノヤマホタルブクロが多い。

・**ウツボグサ**（シソ科）シソ科の特徴の一つである茎が四角であるのと、花が紫で美しいのでよく目につく。田の畦や山麓などに多い。子ども達が花穂から花を一つずつ抜きとって蜜を吸うのでスイバナともいう。夏の終りに花穂だけ褐色に枯れるので漢方では夏枯草といい薬用としている。

・**イヌゴマ**（シソ科）水田のあぜなどによくみかける。四角い茎がよく目立ち、淡紅紫色の花穂も目をひく。ゴマに似ていて役に立たないということでイヌゴマという名がついた。全体の様子は根茎を食用にするチョロギに似ている。

・**オカトラノオ**（サクラソウ科）平地から山地にかけて多く、白い花を密につけた長い花穂はよく人の目につき、野趣があるので生花の材料にもされる。葉を噛むと酢っぱい味がするので、白馬村あたりではヤマスイコと呼んでいる。似たものにヌマトラノオがあるが、こちらは湿地に生え、枝分かれをし、花穂が小さく先が曲らない。

・**ゲンノショウコ**（フウロソウ科）薬草としてあまりにも有名。この辺のものは白に紫のすじのある花をつける。木曽より西では赤花のものも見られる。

・**コマツナギ**（マメ科）河原の堤防や乾いた路傍に多い。小さなピンクの豆花を穂状につける。半灌木状で強く、駒を繋ぐことができるということでこの名がついたという。

・**ヘクソカズラ**（アカネ科）外側が白く内側が紅紫の筒状の美しい花をつけ垣根や他の木や草にからまっている蔓草だが、悪臭があるので屁糞蔓という大変な名前を頂いてしまった。花後の粒状の実は橙色に熟すがこの実はシモヤケの妙薬として珍重される。

ヘクソカズラ

・**キンミズヒキ**（バラ科）黄色の梅形の花が長い花穂に沢山つく。花後にできる果実は人の衣類にくっついて種子の散布をする。このように体にくっつく種子をこの辺ではすべてバカといっている。ヌスビトハギもヤブジラミもイノコズチもみなそう呼ぶ。

・**カワラサイコ**（バラ科）羽状に裂けた葉の裏が真白く、黄色い梅花をつけるこの草は河原などの乾燥地に多く、人の目をひく。

・**カワラナデシコ**（ナデシコ科）秋の七草として知られる。この辺では高瀬川の土手などに群生していてよく目につく。細く切れた花弁をもつピンクの花は多くの人に愛され、庭の一隅に植栽している人もある。

・**スベリヒユ**（スベリヒユ科）畑の雑草として農家の人を苦しめる草の一つ。抜きとってもなかなか枯れず、雨が降るとまた活着してしまう。同じ仲間のマツバボタンは花が美しいので大切にされるのだが。

・**ネジバナ**（ラン科）ピンクの小花を沢山綴

った長い穂がラセン状に伸びているこの花は以前は草原や河原に多くあって、子どもたちが花束を作ったほどだが、どうしたことか近頃あまり目につかなくなってしまった。小鉢に植えても十分鑑賞に耐える花だ。

・**ヤブカンゾウ**（ユリ科）田の畦や道ばたに咲く大形なこの花は、夏の田畑路傍の花の代表であろうか。この辺では何処に行ってもみられる。安曇野ではこのオレンジ色の花をトテコッコと呼んでいる。トテコッコはコケコッコと鳴くニワトリの肉冠を連想したのかも。似たものにノカンゾウがあるが安曇野にはない。その代りユウスゲがあちこちに咲く。

・**ヒルガオ**（ヒルガオ科）この辺ではアメフリバナとかチョコバナとか呼んでいる。アサガオと同形のピンクの花は昼間咲いているのでヒルガオという。万葉集ではカオバナといっている。花が一まわり小さく、葉がホコ形で両翼の張り出しているものがあ

コヒルガオ

りこれをコヒルガオという。

・**ツユクサ**（ツユクサ科）特徴のある形と澄み切った空色の花をつけるこの草は誰でも知っている。花弁の汁を紙につけて遊ぶ子どもたちによりインキバナという地方名がつけられている。

・**オモダカ**（オモダカ科）紋章にまでされている特徴のある形の葉をもち、三枚の白い花弁をもつ花を何段にもつけるこの植物は多くの人の目を引く。以前は水田の中に沢山咲いていたが、除草剤の影響でこの頃はめったにお目にかからなくなってしまった。

二、山麓や山地の花

・**オタカラコウ**（キク科）フキのような大きな葉をもち、大きな黄色の菊花を長い穂にいくつもつけるので遠くからでも人目につく。山の沢筋に多い。似たものにメタカラコウがある。こちらは名前の通り葉も三角状で小形で舌状花の数も少ない。

・**サワギク**（キク科）名前のように山の沢辺に生える。細かく裂けた葉をつけ、小さな黄色い菊花をつける。全体弱弱しい感じのこの草はかえって印象に残る。

・**コウリンカ**（キク科）名前は紅輪花という意味。紅味の強いオレンジ色の長い舌状花が下にたれ下る特徴のあるこの花は高原などで時々目にするが群生はしていない。

・**ヨツバヒヨドリ**（キク科）秋の七草の一つにフジバカマがあり、これと似た花をつける植物にヒヨドリバナがある。何れも二枚の葉を対生につけるがこれは四枚の葉を輪生に何段にもつけ、茎の先にフジバカマ状の小花を群がりつける。高原から高山にかけて分布する。二米近い茎が株立ちする。

・**シデシャジン**（キキョウ科）細く切れこんだ紫色の花弁をもつ変った花をつけるこの草は、あまり多くなく、人目につかないが一度見た人は忘れない花の一つである。

・**ソバナ**（キキョウ科）若苗は山菜として食べられるが、紫色の鐘状のきれいな花を沢山つり下げることを知っている人はきっと遠慮することと思う。

・**ママコナ**（ゴマノハグサ科）花の中に米粒のような白い突起があるのでこの名がついた。ママはマンマ（飯）のことでママコは継子のことではない。この辺の山地にあるのは殆んどミヤママママコナの方である。

・**イブキジャコウソウ**（シソ科）高山植物の仲間にもはいっているが、この辺では高瀬川の河原などに多い。安曇野ではコショウグサと呼んで昔から浴湯料として利用していた。漢方で百里香というほど香が強い。

・**シシウド**（セリ科）高原で最も壮大な草はこれである。丈の低い草の中で一際目につく白い散形花は多くの人の注意をひく。根は独活といい薬用にする。これと似たものでこの辺にはオオハナウドがみられる。

・**ヤナギラン**（アカバナ科）この花を信州の高原で一度でも見た人は一生忘れないであろう。紅紫の花は洋蘭の花のようで、葉は柳の葉を思わせるのでこの名がある。大町の鹿島国際スキー場や松本の美ケ原高原などの群生地は特に見ばえがする。フシグロセンノウと共に私の好きな花の一つである。

・**オトギリソウ**（オトギリソウ科）鷹匠の兄がこの草が鷹の傷に効く事を他に漏らした弟を切り殺したとの伝説により誰にも知られた草で、この辺に多い。タカばかりでなく人間の傷にも卓効がある。同じ仲間で花も草丈も大きく、花弁が巴形になっている。トモエソウも時々みかける。

・**クサフジ**（マメ科）フジのような花が咲く草ということでこの名がついた。紅紫の蝶形花が小さい穂に群がりつく。似たもので花も葉も大きいツルフジバカマがあり、あちこちのヤブにからまっている。

・**イタチササゲ**（マメ科）薄黄色の蝶形花はのちに褐色に変わる特性がある。全体の形がエンドウに似るのでエンドウソウともいいこの辺では若苗を山菜として食べている。

・**シモツケソウ**（バラ科）チラシずしなどに使うデンプを思わせるような花を沢山つけるこの草は誰でも一枝折りたくなる。この近くでは八方尾根に多い。山草愛好家に狙われる花の一つである。この仲間にオニシモツケがある。大形で可愛味がなく、花色もピンクでなく白花であるので誰も見向きもしない。名前にも鬼とついていて気の毒。

・**ヤマオダマキ**（キンポウゲ科）この花には紫褐色のものと黄色のものとがあり、黄色のものの方がやゝ花期が遅れる。大町周辺には黄色のキバナノヤマオダマキの方が多い。高山とくに白馬岳にはミヤマオダマキがあり、栽培のオダマキの原種といわれる。

・**シナノナデシコ**（ナデシコ科）栽培のアメリカナデシコ別名ヒゲナデシコに形が似ている。大町から北の小谷村には多い。姫川の川原や崖崩れのあとに美花を咲かせる。

・**ナツエビネ**（ラン科）エビネの仲間は大抵春咲きであるのにこの花は夏に咲き花色もピンクで変っている。この近くでは小谷村の山間などの多雪地に生えているが数は少ない。花の沢山ついた株はみごとである。

・**オオウバユリ**（ユリ科）この植物はウバユリの変種といわれるがこの辺のものは殆んどオオウバユリである。テッポウユリに似た形の淡緑白色の花と、ユリとは思えない網状脈をもった葉は初めてみると奇異な感じがする。山の木陰にしばしば姿をみせる。

・**オオバギボウシ**（ユリ科）日当りの良い山の草地に多い。名のように葉の大きいギボウシで、夏に長い花茎を伸ばして淡紅紫の花をいくつも横向きにつける。似たものにコバギボウシがあるがこちらは名のとおり小さい。どちらも若い葉柄をコウレッパとかウリッパといい山菜として食べている。

（東山低山帯野外博物館学芸部長）

大町市のトンボ類

枝　重　夫

中綱湖でのトンボ採り
（1980年8月2日）
左から宮田渡、白沢良一、コーベット教授（イギリス）、曾根原今人、枝洋樹、枝重夫（筆者）

長野県大町市のトンボについて私はすでに〝大町市史　第一巻　自然環境・自然環境資料〟（大町市、昭和59年7月1日）においてその概説と計69種のリストならびに採集データ、および主な種類の解説を行なっている。しかし、その後2種の追加があり、さらにこの書物が一般の人の眼にふれるのは少ないのではないかと思われるので、若干の重複をかえりみずに再び取り上げることにした。なお冒頭の写真は世界的なトンボ学者コーベット教授との記念写真である。

一、概説

大町市のトンボは、均翅類の4科と不均翅類の7科の計11科71種が記録されている。科名と種名を挙げれば次の通りである。

A　均翅亜目（4科16種）

イトトンボ科：モートンイトトンボ、キイトトンボ、アジアイトトンボ、クロイトトンボ、セスジイトトンボ、オオイトトンボ、エゾイトトンボ、オゼイトトンボ

モノサシトンボ科：モノサシトンボ

アオイトトンボ科：オツネントンボ、ホソミオツネントンボ、アオイトトンボ、オオアオイトトンボ

カワトンボ科：ハグロトンボ、アオハダトンボ、ヒガシカワトンボ

B　不均翅亜目（7科55種）

ムカシヤンマ科：ムカシヤンマ

サナエトンボ科：ミヤマサナエ、ヤマサナエ、ホンサナエ、コサナエ、ダビドサナエ、モイワサナエ、クロサナエ、ヒメクロサナエ、オジロサナエ、アオサナエ、オナガサナエ、コオニヤンマ、ウチワヤンマ

オニヤンマ科：オニヤンマ

ヤンマ科：サラサヤンマ、ミルンヤンマ、コシボソヤンマ、アオヤンマ、カトリヤンマ、ヤブヤンマ、ルリボシヤンマ、オオルリボシヤンマ、ギンヤンマ、クロスジギンヤンマ

エゾトンボ科：オオトラフトンボ、カラカネトンボ（新記録）、エゾトンボ、ハネビロエゾトンボ、タカネトンボ

ヤマトンボ科：コヤマトンボ、オオヤマトンボ

トンボ科：ハラビロトンボ、シオヤトンボ、シオカラトンボ、オオシオカラトンボ、ヨツボシトンボ、ハッチョウトンボ、ショウジョウトンボ、コフキトンボ、ミヤマアカネ、アキアカネ、ナツアカネ、リスアカネ、ノシメトンボ、コノシメトンボ、マユタテアカネ、マイコアカネ、ヒメアカネ、ネキトンボ、キトンボ、コシアキトンボ、ハネビロトンボ、コモンヒメハネビロトンボ（追加記録）、ウスバキトンボ

以上の合計が71種でなる。この種数は長野県全体の91種に比べると78%になり、かなり豊富であると言える。これは仁科三湖や居谷里池など湖沼が多いこと、またそこに流入・流出する河川のあること、さらに居谷里湿原という市の特別保護地域を持っていることなど、トンボの生息環境が恵まれているからである。

二、代表的トンボ

オゼイトトンボ　群馬県の尾瀬ケ原で発見されたのでこの名前がある。その後、北海道と本州東北地方、関東・中部の山地に分布することが判った。日本特産種である。長野県では、上水内郡戸隠村黒姫山麓から一九五七年に発表されたのが最初であるが、実は居谷里湿原において倉田稔・福島融両氏が一九五六年七月二十七日に2♂を採集しているのでこちらが最初であったが、発表が六年後の一九六二年のため二番目の産地となっている。三番目は一九七一年に発見された茅野市蓼科湖で、昨年四番目として北安曇郡白馬村親海湿原が発見された。現在のところ長野県からはこの四つの産地しか知られていない。

オジロサナエ　本州、四国、九州に分布する日本特産種である。長野県では、塩尻市東山、下伊那郡下条村、佐久市内山、長野市信更町の四カ所（発見順）が知られていたが、一九八一年白沢良一氏が居谷里池を発見した。

アオヤンマ　本州、四国、九州、朝鮮半島、中国に分布している。長野県では一九八〇年七月十三日に白沢良一氏が大町市神栄町で1♂を採集したのが最初で、その後、長野市篠ノ井犬石からも知られた。さらに昨年（一九八四年）白沢氏は北安曇郡白馬村親海湿原に生息するのを発見した。

カラカネトンボ　北海道、本州中部以北に分布する。長野県では山地から亜高山地帯の湿原にある池に生息する。今回初めて大町市蟹が池で白沢氏が1♂を採集した（一九八四年六月二十四日）

ハネビロトンボ　極東南部、東南アジアに広く分布する。日本では、四国、九州の南部、南西諸島、小笠原諸島などに生息している。しかし飛翔力が強いので本州各地から採集されている。長野県では、岡谷市と下伊那郡松川町からそれぞれ1♂が採れ、塩尻市で1♂が目撃されただけであった。一九八三年八月に白沢氏は大町市中山高原の池に多類発生しているのを発見し、同氏、佐川篤氏、宮沢有正氏、筆者らで合計24♂が採集された。幼虫は低温に弱いのでこの池での越冬はできない。

コモンヒメハネビロトンボ　前種と同様の分布を示すが、より南方系で、日本では南西諸島から知られている。本州からは一九六一年に愛知県から1♂が採れたに過ぎない。ところが、白沢氏が一九八三年八月二日に前記中山高原の池で撮影したトンボが、この種類らしいことが判った（写真）。本州2頭目であるが、残念ながら採集はできなかった。

以上を要約すると、大町市の注目すべきトンボのほとんどは白沢良一氏の調査によるものであると言うことができる。

コモンヒメハネビロトンボ♂
中山高原の池、1983年8月2日
白沢撮影

（松本歯科大学教授
日本蜻蛉学会事務局長）

訂正

前号4P冒頭、三月二十九日は四月二十九日の誤りでした。訂正してお詫びします。

山と博物館 第30巻 第6号
一九八五年六月二十五日発行
発行所　長野県大町市　TEL㉒〇二一一　大町山岳博物館
印刷所　長野県大町市俵町　大糸タイムス印刷部
定価　年額一,二〇〇円（送料共）（切手不可）
郵便振替口座番号（長野四―一三二九三）